

作品タイトル

『十三夜の姫たち』

元にした作品のタイトル

『かぐや姫』 『浦島太郎』 『瓜子姫と天邪鬼』

著者名

川瀬えいみ

あらすじ

「そうして、お姫様と王子様はいつまでも幸せに暮らしました」で終わる西洋の白雪姫やシンデレラ姫の物語とは全く逆の人生を生きた、日本のかぐや姫、竜宮城の乙姫、瓜子姫。

三人の姫は、日本の幸せな姫を探して、十六歳の女子高生・日ノ本幸姫の許にやってきた――。

特記事項

現代のファストフード店で繰り広げられるコスチュームプレイ？

本編文字数

4996 字

「私は、物語では、何人もの貴公子を破滅させたことを綺麗さっぱり忘れて月に帰った冷徹女にされているのよ。私が望まぬ犠牲に心を痛めて死んだという事実は、誰かにとって都合が悪いのかしら」

と嘆いたのは、踵まで届く豊かな黒髪をたたえ、目にも鮮やかな梅重の十二単をまとった平安朝風の姫君だった。

「私は、七百年もの長きに渡って贅の限りを味わわせ、誠心誠意尽くしてやった男に、あっさりと捨てられた。腹立たしいこと、この上ない」

と憤るのは、頭上で束ねた髪に金銀珠玉の飾りをつけ、紫の大袖と下衣、肩には薄絹の領巾をかけた奈良時代の礼服の姫。

「私は、お城の殿様に見初められての輿入れの日、ストーカー男に殺され、顔の皮を剥がされました。あの痛みと無念は忘れられません……！」

と嗚咽を洩らしたのは、腰までの髪を首の後ろで一つにまとめ、草木染めの動きやすい小袖を着た若々しい少女。

場所は月読神が治める月の夜の国にある寝殿造の館で、

「なぜ、日本の昔話の姫たちは、西洋の白雪姫やシンデレラ姫のお話のように、『そして、お姫様と王子様はいつまでも幸せに暮らしました』という結末を迎えないのかしら」

と呟いたのは、なよ竹のかぐや姫、竜宮城の乙姫、瓜子姫の三姫だった。いづれ劣らぬ日本昔話の大スターたちである。

「この国のお国柄でしょうか」

「身分の高い姫の結婚はほとんどが政略結婚だったから、現実に幸せな一生を送った姫が少なかったせいかもしれぬな」

「けれど、それは西洋でも同じなのでは？」

「身分の高い綺麗なお姫様も幸せになれるとは限らない——という現実を物語に落とし込んだのが日本で、現実はどうあれ、せめて物語の中では幸せに——という夢物語を描いたのが西洋なんじゃない？」

「生まれた国が悪かったということか？ それは納得できぬ」

「日本にだって幸せな姫はいるはず。幸せな姫君を探してみましようよ」

「おお、それはよい」

三人の姫の決意に困惑したように、月の空では青い地球が微かに首をかしげ

ていた。

その日は定期試験の最終日。日ノ本幸姫は、駅前のファストフード店の二人掛けテーブルで友人が来るのを待っていた。

隣のテーブルにシェイクのカップを手にした派手な服装の二人の女性が陣取った直後、三人目の女性が幸姫が掛けていたテーブルの向かいの席に着いたことで、幸姫は我が身に降りかかる異常事態に初めて気付いたのである。

(ん?)

スマホの画面から顔を上げると、幸姫の正面には、裏葉色の浴衣に似た着物を着た少女がいた。歳は高一の幸姫と同じほど。途轍もない美少女である。

幸姫の隣の席には、重そうな十二単を着用した長い黒髪の女性。幸姫のはす向かいには、身の丈の三倍はありそうなストールを肩にかけた個性的な髪型の女性。

派手な三人の女性たちの姿を、店内の客たちがちらちらと盗み見ている。

ランチには遅く、ディナーには早い時間帯。席は他にいくらでも空いている。幸姫は、自分がこんなにも派手派手しい女性たちに取り囲まれる理由が全くわからなかった。

「日ノ本幸姫だな？」

尋ねてきたのは、幸姫のはす向かいの席に着いた不思議な髪型の女性だった。幸姫が頷く前に、幸姫の隣に座った十二単の女性が、

「私はなよ竹のかぐや姫。こちらは竜宮城の乙姫と瓜子姫よ。よろしくね」

と自己紹介。

「私たち、日本の幸せな姫を探して、ここに来たの」

と微笑んだのは、三人の中では常識的な服装をした美少女だった。常識的といっても、それはあくまで「他の二人に比べれば」という相対的な評価だが。

驚きのあまり声も出せずにいる幸姫に、三人の姫君は彼女等がここに来た事情を丁寧に語ってくれたのである。

「——というわけで、ネットで、『日本』『幸せ』『姫』等のワードで検索してみ

たら、そなたに辿り着いたのだ」

「嘘でしょ。私、個人情報の世界に公開するようなことはしてないよ」

「月の夜の国のネットでは、生死を問わず、すべての人間の個人情報がゲットできるのよ」

自分の子孫や恨む相手を探し出すために――と言われて、幸姫は少々渋い気持ちになった。

『日本』『幸せ』『姫』……って、たまたま名前がそれっぽいです。人間の人となりや境遇が名前で決まるなら、美子さんはみんな美人になるはず。でも、現実はどうじゃないでしょ！」

幸姫の反駁に、三人の姫が黙る。非常識な恰好をした姫君たちは、幸姫の主張の論理性は認めてくれたようだった。彼女等の沈黙が、幸姫に力を与える。

「名前に『姫』の字はついてるけど、私は正真正銘、一介の庶民。自慢じゃないけど、特に可愛いわけでもないし、頭がいいわけでもない。運動神経もいまいちで、ありとあらゆる要素が平均以下。幸せな姫なんて、まじで名前だけだから！」

肩で息をし、反論できるならしてみろという勢いで、幸姫はまくしたてた。

少しの間をおいてから、かぐや姫がおずおずと小声で意見を述べてくる。

「けれど、鬱陶しい求婚者たちにまとわりつかれて難儀してはいないのでしょ
う？」

「何百年も尽くした男に捨てられたこともない」

「何も悪いことをしていないのに、妬まれて殺されたわけでもないのよね？」

「お姫様たち、私がおもてなくて、尽くす彼氏もいなくて、人に妬まれるほどの才もない雑魚キャラだって言ってます？」

それは確たる事実だが、他人に指摘されて嬉しいことではない。

「でも、それはとても……とても幸せなことでしょう？」

心の底からそうと信じているらしい姫君たちの眼差し。幸姫は軽い目眩いに襲われた。

この三人が本物の姫なのか正気なのかということは、もはや問題ではない。自分の正気を保つために、彼女等を論破して、ここから消えてもらわなければならないと、幸姫は強く思った。

「それは、あなた方に比べたら私の境遇が劇的でなく平凡だってだけで、私が幸せだということじゃありませんよね？ 証人欲求の強い主役志向の人たちには、派手で目立つ姫様の方が幸せに見えると思います。お姫様たちになりたいと思う人はたくさんいるでしょうけど、私になりたいと思う人間は、この世にただの一人もいませんよ！」

「な……何もそこまで卑下せずとも……」

「つか、そもそも、特に有名なあなた方が悲劇的だってだけで、日本にだって、お三方ほど有名じゃないけど幸せなお姫様は結構いるんじゃないですか？」

そう言いながら、幸姫は日本の昔話をあれこれ思い浮かべてみたのである。

桃太郎、金太郎、かちかち山、舌切り雀、さるかに合戦、わらしべ長者。鶴の恩返しや雪女は悲しい結末。確かにお姫様が幸せになって終わる物語はすぐには思い浮かばない。

最後に、幸姫は何とか一つだけ思いついた。

「一寸法師のお姫様はどう？ 一寸法師は大きくなって、めでたく貴族のお姫様と結婚したのよね？」

瞳を輝かせて告げた幸姫に、三人の姫はどんよりした眼差しを投げてきた。

「そなたは知らぬのか？ 一寸法師は、眠っている宰相の姫の口のまわりに米粒をくっつけて、自分の飯を姫に盗まれたと嘘をつき、姫が父の屋敷を追い出されるように仕向けた卑劣漢だ。濡れ衣を着せられた姫は、一寸法師と結婚してから、その事実を知らされて、それ以来ずっと夫を憎み続けている」

「それは、お気の毒というか何というか……」

ひどい男に引っかかったものである。一寸法師の妻にされた姫君に、幸姫は同情を禁じ得なかった。

が、それはそれでそれとして。やはり、三人の姫君にはお帰り願わなくてはならない。幸姫は気を取り直し、再び姫たちの論破——もとい、説得——に取りかかった。

「で……でも、ものは考えようだよ。かぐや姫さんは、意に沿わない結婚を毅然として跳ねのけた。乙姫様は、恩知らずの男に未練がましく追いつがらない

女の気概を示した。瓜子姫さんは、理不尽な暴力の被害者として、大勢の日本人に邪悪を憎む正義の心を植えつけた。姫様方は後世の人々に役立つ物語を残したの。姫様方は、すごく有意義な人生を送ったと思う。そのことを誇りに思えばいいんじゃないかな。自分は不幸だったとは思わずにさ」

「そんな理屈……」

「お姫様たちは不運だったかもしれないけど、不運と不幸は違うでしょ。自分の一生の幸不幸は、自分が——お姫様たち自身が決めること。何事も考え方次第だよ」

「だが、どう考えても我等は……」

「容姿も才能も、身分や性格だって、お姫様たちは、いろんなことが人並以上じゃん。すごい恵まれてるよね」

「それはまあ……」

そこは否定してこない。さすがは有名な物語の主演を張る姫君たちだと、幸姫は胸中で感心した。

「それに、お姫様たち、育ててくれた親御さんには愛されたでしょ。そんなふうに良かったことも忘れちゃいけないよ。親が悲しむよ」

幸姫が、今度はしんみりと語りかける。その効果は絶大だった。

「そなた、まだ若いのに、いいことを言うのう」

「本当に十六歳か？」

そう確認を入れてくる姫たちは、見た目は十代でも、数百年は生きて(?)いるのだろう。自分が昔話の姫君たちと言葉を交わしていることに、幸姫は今頃になって不思議な気分を抱いた。

「子どもの頃にお姫様たちのお話を読んで、いろいろなことを考えたからね。お姫様たちのお話は、後世の人間がより良い人生を送るための貴重な教材——学びの種になってるんだよ。ありがとう」

「そう考えれば、我等のつらさも、少しは報われるな」

「そうだよ！ お姫様たちは日本の宝！ 日本の誇りだよ！」

ここぞとばかりに気負い込んで畳みかけ、

「そういうものかもしれぬな……」

幸姫は、目論見通り、姫たちを論破——もとい、説得することに成功したの

である。

そこにタイミングよく、幸姫の待ち合わせの相手がやってきた。

「コウキ、そこか！」

「あ、ヤマト、こっちー」

同じクラブの沢原大和。入部時から何となく気が合って、最近の幸姫は彼と一緒にいることが多くなっていた。

「悪い、待ったか？ って、誰だ、この異様な人たち」

大和の極めて常識的な反応に、幸姫はなぜか安心感を覚えたのである。

「あ……うん。近くの劇団の人たち……かな」

不運な姫君たちが非常識なコスプレイヤーと思われずに済むように、幸姫は咄嗟に嘘をついた。

「ボランティアでね、このへんの幼稚園で、昔話の劇をやってるんだって」

「へえ。かぐや姫に乙姫様に……」

「瓜子姫」

幸姫が美少女の名を告げると、大和は少し申し訳なさそうな微笑を瓜子姫に向けた。

「すごい本格的ですね。綺麗なお姫様たちで、子どもたち、喜んだでしょう？」

若いイケメン高校生に爽やかに褒められたというのに、三人の姫君は喜ぶ素振りも見せなかった。三人揃って、微妙な——どんな表情を作ればいいのか迷っているような顔つきになる。

ともあれ、待ち合わせの相手と合流できさえすれば、ここにい続ける必要はない。幸姫は、姫たちをここから追い払うのではなく、自分がこの場を立ち去ることにした。

「やっと地獄の試験期間が終わったことだし、打ち上げにカラオケ行こ。私、地理は赤点かもしれないから、慰めてよ」

「やるべきことはやったんだし、結果は考えないことにしよう。それじゃあ、お姫様方、失礼します」

幸姫の心を読んでいるかのようにスムーズに、大和が幸姫の提案に乗ってくる。二人の波長が合うことを、幸姫は改めて認識した。

そうして、うきうきした様子の幸姫と大和が立ち去ったファストフード店内には、呆けた顔をした派手な身なりの三人の姫君が残されたのである。

「あの娘、やはり、幸せな姫ではないか」

最初に気を取り直して、胸中のもやもやを言葉にしたのは竜宮城の乙姫だった。

「けれど、あの娘の言う通り、私の人生には良いこともありました」

と、なよ竹のかぐや姫。

「うん。私のおじいさんとおばあさんは、瓜から生まれた私を可愛がってくれた」

「あの娘、我等の物語を読んで、いろいろなことを考え学んだと言っていた。あの娘だけでなく後世の多くの人々に、幸せの意味を考えるきっかけを与えられたのだと思えば、我等も生きた甲斐があったというものか」

乙姫の言葉に、かぐや姫と瓜子姫が頷く。

「では、月の夜の国に戻ることにしましょう。久し振りに、一寸法師の奥方を訪ねてみませんか？ 愚痴くらい聞いてあげられるかもしれません」

「それはいい考えです」

すっかり温くなったバニラシェイクを飲み干した三人の姫君は、そうして月の夜の国への帰途に就いたのだった。十三夜の月ほどに満ちた気持ちで。